⑤４年生の実践記録

ア．本年度の取り組み

「福祉」を材に、１学期は福祉について「知る」→２学期は知ったことを基にしながら、高齢者と交流する機会を作り、実際に「試してみる」→３学期はさらに良い交流会となるように「自分たちで活動する」という単元の流れで行った。

１学期は、障がい者についての自分の課題を立て、それぞれ学級の子供たちの興味・関心に合わせグループに分かれて取り組んだ。(「身体障がい者」「聴覚障がい者」「視覚障がい者」)

調べたことを分析し、模造紙・動画・スライド等を活用し、まとめた。学級内で報告し合ったり、廊下に掲示して他の学年に見せたりすることで、障害に対しての理解を深めることができた。

また、障がい者の方は、何か特別な存在ではなく、自分たちと一緒の存在で同じように生きていることに気づき、みんなで同じように楽しむ児童も出てきた。

２学期は、１学期に知ったことを基に、福祉での対象が他にないか、話し合った。その際に、高齢者や妊婦もそうであると考え、高齢者に対しての正直なイメージを伝え合った。「話しにくい」「話題に困る」「車いすの人にどう接すればよいか分からない」という現状から、「高齢者と友達になりたい」という課題設定をした。具体的な姿として、挨拶をし合ったり、話が気軽にできたりしたい…と思い描いた上で、活動の計画を立て、準備することになった。

まずは、身近な高齢者として自分の祖父母にインタビューをしてみた。祖父母の好きなことの中には、児童の知らない物もあり、自分たちでクロムブックを活用して調べ、昔のことや高齢者に対して興味関心を高めていた。

その後、学校近くの「福祉の里」(高齢者との関わりが持てる施設）にてインタビューを行った。インタビューの中で、自分たちとの共通点や、高齢者の方の新たな一面を知ることができた。さらに、栄緑道や栄地区に突撃インタビューに行き、情報を集めた。

児童から「もっと多くの人とインタビューしたい」「もっと高齢者と関わりたい」という願いが出てきたので、教師が主となって『ペットボトルボウリング大会』を企画した。

今後はこのボウリング大会を通じて、「もう一度ボウリング大会を開きたい」「今度は別の会を自分たちで企画したい」と考えるであろう児童を中心に、２回目を開きたい。その際に、「何かしてあげる」という視点にならないように注意したい。「共に楽しむ」という視点を忘れず、相手意識を持ちながらも自分も楽しむ心を忘れないような指導をしていく。

３学期の構想としては、自分たちで企画した会を振り返り、さらに良い交流会を目指す取り組みを考えている。自分たちの振り返りや、１回目の会の参加者の感想を基に、さらに共に楽しむことができる会を計画していきたい。

「福祉」という難しい概念を、４学年で取り組むことは難しかったが、１年間計画的に取り組むことで、「共に生きる」という視点を児童が持つことができたことに価値を感じた。

イ．実践しての成果（○）と課題（●）

【児童】

○総合的な学習の時間の学習について、楽しみにする児童が増えた。

○「自分たちでこうしたい！」と考え、実行しようとする姿勢が見られるようになってきた。

【教師】

○児童の言葉を紡いで、授業を組み立てる意識が高まってきた。

●１年間の見通しを持つことが難しかった。

特に例年とは異なり、新しいことに取り組もうとすると負担が大きかった。

ウ．来年度に向けて

・明日チャレ！、車いす体験、和光特別支援学校との交流、の位置づけを明確にすること。